

Austen の小説と Shakespeare 喜劇の比較研究

湊 純子*・瀬尾 勲 夫

A Critical Comparison of Austen and Shakespeare

Junko MINATO, Isao SEO

Abstract

Jane Austen's novels were written when the English novel was developing, so it is clear that Austen absorbed various elements of literature of her age and created the original style of her own. In Austen's novels there exists the conspicuous factors of plays in the Elizabethan Age. Indeed, Austen had enormous enthusiasm for plays of Shakespeare, who was one of her favorite dramatists. Shakespeare's comedies greatly contribute to Austen's cultivation of her comic spirit and selecting the main theme in her novels, or self-discovery.

This essay is concerned with a critical comparison of Austen's novels and Shakespeare's comedies, especially comparing *Emma* with *Twelfth Night*, and *Pride and Prejudice* with *Much Ado about Nothing*. Both Austen and Shakespeare write their works about mistaking pretence for truth, which are described comically and vividly.

By the way, there are two kinds of mistaking pretence for truth in Austen and Shakespeare. Many comic characters or fools in their works make these mistakes, but they do not go through the inner changes by these mistakes, so they cannot awake from their illusions in the essential meaning, while heroines, even if they mistake pretence for truth in the same way, can realize their inner changes through these errors. As a result, heroines can attain self-awareness or self-discovery from delusion, which is the most important theme of Austen and Shakespeare.

* 平成9年徳島大学大学院人間・自然環境研究科修士課程修了。徳島市国際交流協会勤務を経て、平成16年10月より徳島大学大学院工学研究科博士課程後期に在学中。

I

Jane Austen (1775-1817) の活躍した 18 世紀後期は、小説はまだ新興勢力であり、依然として文学において演劇が多大な影響力を持っていた時代である。実際、R. B. Sheridan (1751-1816) の風習喜劇が大いに人気を博し、演劇そのものが英国全土で大流行していた時代でもあった。劇場の設営は地方都市にまで普及し、その結果、都会に比べて上演の機会の少なかった地方においても演劇は十分に鑑賞できるようになっていたのである。また、当時、演劇好きな家庭では家庭演劇なるものが発達していたという興味ある社会的事実とも重なって、一般大衆の多くが演劇なるものを非常に身近な娯楽として楽しむという状況が生まれていたのである。

このような背景にあつて、Austen の家族も皆芝居が好きで、読書や観劇の他に、一家団欒の中で家庭演劇もしばしば行っていたようである。事実、Austen の小説 *Mansfield Park* には、こうした一家の家庭演劇の様子を彷彿とさせる場面が数多く盛り込まれている。例えば、厳格な家長 Sir Thomas の長期の留守中、Mansfield 邸では家庭演劇上演の計画が持ち上がり、球技場に設けられた舞台の設営や台本が決まるまでのやりとり、下稽古や衣装あわせの様子などが実に生き生きと描写されている。とりわけ台本を決める場面で、Shakespeare 劇をはじめ Sheridan、Colman 等による数多くの演劇が候補としてあがっては、どこかしらに不満があつて没になる描写などは、Austen が多くの演劇に親しんでいたことを如実に示すものである。

ひとつの台本が決まるまでには、舞台の規模、役者の人数、配役や各々の好み、モラルの基準を満たし、純粋な娯楽として皆が楽しめる内容か否か等¹⁾多くの条件が満たされなければならず、適当な台本を見つけることは大変な作業であり、こうしたことが間接的に影響してか、Austen 自身が演劇の台本を書くこともあったようである。Austen の *Juvenilia* と呼ばれる初期の秀作に、物語体の小説、書簡体小説とともに自作の喜劇が含まれていることから、演劇は鑑賞や実演を通じて単に Austen の文学的土壌に影響を及ぼしただけでなく、彼女に作品を描くきっかけをも与えるという重要な役割を果たしていたと言えよう。

Juvenilia に演劇、書簡体小説、物語体小説という 3 種類の形式が使われているという背景には当時の文学的事情を十分に考慮する必要もあろうが、同時に、

1) 都留信夫『イギリス近代小説の誕生—18 世紀とジェイン・オースティン』（ミネルヴァ書房、1995） p. 179.

このことは Austen 自身が最終的に物語体の小説によって本格的な作品を書き始めようと決心するまでの試行錯誤の過程を見事に映し出しているとも考えられる。事実、Austen はそれぞれの文学形式から多くの影響を受け、その要素を後の小説に取り入れており、中でも演劇からの影響は特に重要と判断される。

演劇からの影響として、まず、考えられるのは台詞である。Austen の小説の持つ重要な魅力のひとつは、登場人物たちの会話の生命力にある。対話だけで成り立つ演劇では、ストーリーの説明や進行も全て会話の中で為されるが、Austen の小説中の会話はこうした機能を十分に果たしている。

又、Austen は自らの小説の舞台を「田舎のジェントリーの数家族」²⁾という範囲に限定し、又、作品の期間も、年頃のヒロインが理想の結婚相手と出会い、そして結婚に至るまでという比較的短い年月に絞っているのだが、こうした題材の限定は、演劇が持っている、限られたスペースの舞台上で一定の上演時間内に演じられるという構造上の制約に合い通じるものがある。

さらに、演劇特有の舞台上の人物には分からない事が観客には分かっていると言うドラマティック・アイロニーの手法を Austen はその作品の中に取り入れることで、ヒロイン自身は気付いてない「みせかけ」と「真実」の取り違えに、読者の方では早くから気付いているというアイロニーに満ちた多くの印象的な場面を描くことに成功している。

こうした Austen 文学への演劇からの影響は、当時の小説全体が演劇の影響を多く受けていた必然的結果とも言えるのであるが、同時に、Austen 自身の演劇への嗜好と観察眼を考えると必ずしも無意識的なものばかりではないと考えられる。

事実、Austen は書簡や小説の中でしばしば演劇に関する言及をしているのであるが、なかでも Shakespeare 劇への言及が圧倒的に多く、実に Shakespeare 劇の全 37 編のうち半数近くのタイトルを指摘することが出来るのである。これは当時の英国における Shakespeare 劇の存在の大きさと Austen 自身の Shakespeare 劇への傾倒を如実に表していると思われる。この点に関して、次に示す *Mansfield Park* に登場する Edmond と Henry の間で交わされる会話が参考になろう。

“But Shakespeare one gets acquainted with without knowing how. It is a part of an

²⁾ *Jane Austen's Letters*, edited by R. W. Chapman (Oxford Univ. Press, 1952), To Anna Austen, Sept. 9 [1814]

Englishman's constitution. His thoughts and beauties are so spread abroad that one touches them every where, one is intimate with him by instinct.---No man of any brain can open at a good part of one of his plays, without falling into the flow of his meaning immediately.”

“No doubt, one is familiar with Shakespeare in a degree” said Edmond, “from one's earliest years. His celebrated passages are quoted by every body; they are in half the books we open, and we all talk Shakespeare, use his similes, and describe with his descriptions; but this is totally distinct from giving his sense as you gave it. To know him in bits and scraps, is common enough; to know him pretty thoroughly, is, perhaps, not uncommon;...”³⁾

18世紀後期、英国で William Shakespeare (1564-1616) はすでに国民的作家としての地位を確立しており、その作品は広く一般に浸透していたと考えられる。Austenの書簡に Londonの劇場での *King John*, *Hamlet*, *Merchant of Venice*, *Richard III*等の観劇の様子が記されているように、当時 Shakespeare 劇は頻繁に上演されており、また *Mansfield Park* で台本を決める時に *Hamlet*, *Macbeth*, *Othello* が候補として挙げられていることから、Shakespeare 劇が同時代の演劇とともに根強い人気があったことが十分にうかがえる。さらに、Austen 自身が *Juvenilia* の *History of England* で英国史の知識を Shakespeare 劇から学んだとほのめかしていることや、*Northanger Abbey* においてヒロイン Catherine が成長の過程で Gray, Thompson, Pope とともに Shakespeare の文学を鑑賞し、そこから人生に役立ち、慰めとなる一節を暗記するというエピソード等は、当時の人々にとって Shakespeare 劇が教養を深め、知識を広めるための身近な教科書としてよく読まれていたことを示すものであろう。

このような Shakespeare 劇の当時の影響力を考えると、Austen の小説が演劇の影響、中でも Shakespeare 劇からの影響を受けていたことは明白ではないだろうか。

事実、Austen はその作家としての偉大さという点で、Shakespeare に喩えられることがあるのである。例えば、一九世紀の詩人 Alfred Tennyson (1809-1892) は Austen と Shakespeare について次のように述べている。

Miss Austen understood the smallness of life to perfection. She was a great artist,

³⁾ Austen, Jane. *Mansfield Park*, (Oxford Univ. Press, 1970), p. 338.

equal in her small sphere to Shakespeare... What I really said was that, in the narrow sphere of life which she delineated, she pictured her characters as truthfully as Shakespeare.⁴⁾

小説と演劇という形式の違いこそあれ、生み出す作品の中で、いつ如何なる時代にも通じる人間性の真実を的確に描いているところに、この偉大な二人の作家に共通する資質を見出すことが出来る。中でも Austen と Shakespeare の両作家が作品の中でともに打ち出している「自己認識」のテーマは重要である。主人公が様々な経験を経て、本当の自分に気付いていくというこの「自己認識」のテーマを、Austen と Shakespeare は、主人公が「みせかけ」と「真実」を取り違えることから陥る「迷想」状態からの「覚醒」という組み立てを使用することで、作品の中に見事に描き上げることに成功しているのである。⁵⁾

この論文では、幅広い Shakespeare 劇の中でも Austen の描く小説世界に最も近いと思われる喜劇の分野に範囲を絞って、Austen と Shakespeare がそれぞれの作品において描いた「みせかけ」と「真実」、「迷想」と「覚醒」の織り成す「自己認識」のテーマを如何に描いているかを具体的に考察してみたいと考える。

II

大きく分けて、演劇には喜劇、悲劇、歴史劇という3つの範疇があるが、中でも Austen は喜劇を殊のほか好み、そのため彼女の演劇への言及の多くは主として喜劇に対するものである。この喜劇への嗜好こそが、そのまま彼女自身の描く小説のテーマ、既述した「自己認識」となってはっきりと結晶化されているのである。Austen は Rev. James Stainer Clerk と交わした手紙のなかで「登場人物の喜劇的な面を描くことに自分は向いている」⁶⁾と述べ、自分自身や他人を笑い者にする喜劇の世界を自己の重要な作風と考え、表現し続けていくと宣

4) T. Tennyson, Hallam. *Alfred Tennyson: A Memoir of his son*, Vol. II, p. 371.

5) 「みせかけ」と「真実」、「迷想」と「覚醒」というキーワードは主に次の Austen と Shakespeare を比較した研究書の中で使われているものを参考にした。
石塚虎雄『ジェイン・オースティン小説論』(篠崎書林、1974)、
津田塾大学「文学研究」同人編『ジェイン・オースティン小説の研究』(荒竹出版、1980)

6) *Letters*, Dec. 11 [1815]

言している。

(1) 「みせかけ」と「真実」

Austen の小説には多くの魅力的な喜劇的人物が登場する。James Austen Leigh はこの喜劇的人物の描写において Austen は Shakespeare の道化を描く技量に匹敵すると述べている。⁷⁾ 的確な描写や人物把握という点にとどまらず、両作家に共通する重要な点は、喜劇的人物の描写において、ヒロインの抱えている「みせかけ」と「真実」の取り違えという「間違いの喜劇」を映し出しているところにあると思われる。そこで、性格的に似たところのある Shakespeare 喜劇、*Twelfth Night* の道化 Malvolio と、Austen の *Emma* に登場する喜劇的人物 Elton の両者を、このヒロインの犯す「取り違え」という問題点に注目して、比較、検討してみたいと考える。

Twelfth Night の Malvolio は物語の舞台となるイリリアの国の姫 Olivia に仕える執事で、相談役として信頼を置かれている一方、陽気な家来たちの間では堅物で、自惚れが強く威張ったところが鼻につくと敬遠されている人物でもある。そこで、家来たちは Malvolio の「自惚れ」を笑いものにしてやろうと、彼の恋する Olivia が書いたとみせかけた偽のラブレターを Malvolio に拾わせる。一方、手紙を読んだ Malvolio はその内容から判断して、これはてっきり Olivia が自分宛てに書いた正真正銘のラブレターだと思い込んでしまう。つまり、「みせかけ」の嘘の情報を書いたその手紙は、見事に Malvolio の「自惚れ」と「虚栄心」をくすぐるのである。その結果、皆に盗み見されているとは露知らない Malvolio は自分の影に向かって一人芝居をしながら、Olivia との結婚を夢見るのである。しかし、彼が本心喉から手がでるほど手に入りたいものは Olivia との結婚によって自分にもたらされるであろう地位と権力に他ならない。偽の手紙を読んだからというもの Malvolio は Olivia の話す一言一言を自分に都合よく解釈し、徐々に自分自身を見失っていく。そのため「自惚れ病」にかかった Malvolio は Olivia の気を惹こうと「黄色い靴下と十字架の靴下止め」というグロテスクな格好を身につけても、自分の姿の滑稽さに気付かなくなってしまう。とどのつまり、Malvolio は現実から遠くかけ離れた「自惚れ」の自己像を抱くに至り、結果、彼は自分と Olivia との結婚を思い描くという妄想に酔いしれてしまうことになる。このことは、言ってみれば、「自惚れ」と「虚栄心」のために「みせ

⁷⁾ James E. Austen-Leigh, *Memoir of Jane Austen* (Oxford: 1926)

かけ」と「真実」の識別が出来なくなった「間違いの喜劇」が、Malvolio の描写を通して見事に表現化されていると考えられるのである。

一方、興味あることに、ヒロインの Olivia にも Malvolio と同様の不安定な心理状態、即ち、「みせかけ」と「真実」の識別が出来なくなるという「間違いの喜劇」の投影が見られるのである。⁸⁾

Olivia は、亡き兄の喪に服するため生涯結婚はしないという理由を盾に、彼女に結婚を迫る公爵からの求婚を頑なに拒み続ける、言わば悩める女性として登場する。しかし、女主人としててきぱきと屋敷の切り盛りをする彼女の姿にはそうした暗い影は微塵も見られない。この事は、公爵からの執拗な求婚を断る何某かの口実として、Olivia はある種の「みせかけ」を演じていると考えられるのである。確かに、この時点までは、Olivia は極めて意識的に「みせかけ」を演じることに成功していると言える。しかし、そうした彼女に大きな転換を強いる出来事が起こる。その出来事とは、生き別れになった兄を探し出す目的で男装に身を隠して同じく公爵のもとに使えることとなった Viola との出会いである。生涯結婚はしないと誓った筈のあの Olivia が、Viola に会った瞬間に、皮肉なことに Viola に一目惚れの恋におちてしまうのである。一度恋におちた Olivia にはもはや「みせかけ」と「本当の自分」との演じ分けは不可能になってしまう。結果、公爵の求婚を伝えに来た Viola に対して今まで通り兄の喪に服す妹役を演じながらも、同時に彼女は Viola に指輪を渡して自分の好意を伝えるという矛盾した行動をとってしまうのである。ここに、「みせかけ」を演じていた筈の Olivia が同じく「男装」という「みせかけ」を装う Viola に恋するという皮肉な「間違いの喜劇」の出現。これによって、「みせかけ」と「真実」の識別が出来なくなってしまった Olivia の不安定な心理状態も、極めて象徴的に表現されていると判断されるべきであろう。

かくして、Olivia も Malvolio も抱えている問題の根本は同じである事が判明する。言ってみれば、二人とも、「みせかけ」と「真実」の区別ができなくなったことから生まれる皮肉な「間違いの喜劇」の上演者なのではなかろうか。Shakespeare はヒロインの「みせかけ」と「真実」の取り違えというテーマを道化によってクローズアップし、滑稽な笑いに変えることに成功しているのである。

Austen の小説において Malvolio に匹敵する人物と言えば、Emma に登場する

⁸⁾ 川口清泰訳／ルース・ニーヴォー著『シェイクスピアの新喜劇』（ありえず、1985）
p. 348.

喜劇的人物 Elton であろう。彼は Highbury の牧師に着任することで、安定した社会的地位と日常の生活に不自由しないだけの収入を獲得している。処世術にも長け、他人の目に映る自分の姿をわきまえているので、彼は概して感じのよい青年という印象を周囲から持たれている。が、その実、彼は高慢で、気取り屋、自分の権利ばかり考える冷酷な人物として描かれている。ヒロインの Emma は目をかけている Harriet を Elton と結婚させようと密かに計画し、そのために何かと Elton と親しくする。しかし Elton が欲得から結婚相手として考えているのは Highbury 随一の資産家の娘 Emma に他ならない。その結果、Emma のあらゆる厚意は Elton の「自惚れ」を刺激することとなり、Emma の行為全てを自分への励ましが与えられているものと彼は勘違いしてしまう。例えば、Emma が描いた Harriet の「似ていないことはない」程度の肖像画は、Elton にはどこから見ても瓜二つの完璧な絵に映る。又、既述した Malvolio が自惚れのために「みせかけ」と「真実」の区別がつかなくなり、「黄色い靴下と十字架の靴下止め」を付けた自分の姿が素敵だと思い込んでしまったように、Elton も Emma と結婚した場合の自分の未来に酔いしれることで頭が一杯で、自分の行為の滑稽さに全く気付かなくなってしまう。このように、Elton も Malvolio 同様、「自惚れ」が増長して「真実」が見えず、「みせかけ」の自分と相手の姿にすっかり翻弄されてしまっているところが滑稽に強調され、笑いの対象となっていると言えよう。

ところで、この様に非常に滑稽で、喜劇的に誇張されている Elton の自惚れぶりは、Malvolio と Olivia の場合と同じく、Elton の「真実」が見えていない問題と絡んで、ヒロイン Emma 自身の抱えている深刻な問題と根本的な部分で重なっているのである。

美しく、才気があり、裕福で、住み心地の良い家庭と明るい気質に恵まれた Emma は何不自由ない境遇にあるが、これは Emma に「あまりに自分の思いどおりに出来すぎる力」と「自分を少々よく思い過ぎる気質」⁹⁾という困った弊害も与えている。この「自惚れ」から Emma は他人の幸福に一役買うという善意の名目のもとに縁組を整えることに熱中している。母親代わりでもあった家庭教師の Miss Taylor が結婚して彼女の家を出ると、Emma は孤独感から寄宿学校の生徒 Harriet と付き合いはじめる。Harriet は素直な性格で、Emma を心から尊敬してくれ、その上大変美しいのですぐに Emma のお気に入りとなる。そのために、Emma は Harriet が自分にふさわしい友人になるように様々な企てを仕

⁹⁾ Austen, Jane. *Emma* (W.W. Norton & Company, 1972), p. 1.

掛けるのである。その一つが Harriet の社会的地位である。Harriet が日頃仲の良かった農民の Martin から求婚されると、自分の友人としての Harriet の地位を過大評価するあまり、身分が不釣り合いであると言う理由だけで結婚を断念させ、代わりに「十分立派な紳士であるし、かといって私生児である Harriet の疑わしい生い立ちに正当な立場で文句を言えるほど立派な家柄の出でない」¹⁰⁾という判断から一方的に彼女と Elton との縁組を計画したりする。この様に、Emma は持ち前の自惚れと空想癖から、事実に基づかないで、自分の好みや願望だけで物事を判断しようとする。そのために Emma は Harriet を実際より良く考え、更には Elton の本性にも気付かないこととなる。肖像画への Elton の賛美さえ、「Harriet のことで自分に感謝してくれているのだ」と誤解してしまう結果となる。このことは、Elton が自分は Emma に好かれているという一方的な「自惚れ」によって「真実」が見えなくなったと同様、Harriet に自分の思惑通りの結婚をさせようとしている点、また Elton を自分よりは下の身分と見なして、自分との結婚を考えているなどとは夢にも思わない点で、Emma 自身も己の強い自惚れのために「真実」が見えなくなってしまう事を如実に物語っているのである。

喜劇的人物や道化をヒロインの歪んだ鏡像として描いて、その欠点や誤りを拡大したり、暗示したりする役割を果たしている点で Malvolio と Elton の描き方は共通している。読者や観客が彼らの愚行を笑うことはそこに投影されているヒロインの影を笑うことになり、ここに、人間の不完全さを指摘し攻撃するのではなく、愛情を込めて人間を温かく見守ろうとする Austen と Shakespeare に共通した喜劇的態度が明白に表現されているように思われる。

(2) 「迷想」からの「覚醒」、そして「自己認識」へ

Austen の喜劇性を顕著に表しているものとして次に考えられるのは、六つの小説すべてに「結婚」という喜劇的テーマが描かれ、ヒロインの幸せな結婚で物語が閉じられることであろう。喜劇はそもそも結婚の祝祭、生命の再生への祝福という役割を持っていたため、結婚のテーマと喜劇的形式は結びついており、多くの喜劇では「結婚」の祝祭的な雰囲気幕が降ろされる。¹¹⁾ また Austen と「結婚」のテーマとの結びつきは、その背景に当時の厳重な階層社会に暮らす

¹⁰⁾ *Ibid*, p. 22.

¹¹⁾ 『ジェイン・オースティン—小説の研究—』 p. 260.

女性にとって「結婚」が社会的に生き残る唯一の手段であったため、常に関心をひく大きな話題であったことも考える必要がある。実利的結婚と愛情による結婚のあいだで生じる矛盾や葛藤、そしてヒロインが最終的に幸せな結婚に至るまでの道程を描き、Shakespeare 劇においても大団円で幸せな結婚が生まれるまでに、ヒロインには様々な障害が立ちふさがる。例えば、*Midsummer Night's Dream* の恋人たちの場合には、父親の反対とそれに従わなければ死刑か修道院送りを宣告する村の法律が存在し、その法の効力の届かない隣の村へ駆け落ちしようとする途中、Lysander は「誠の恋の道は決してなだらかにはあらず」¹²⁾ という名セリフを残す。そして、Austen がこの名セリフを *Emma* の中で見事に借用していることはここで指摘するまでも無い。かくして Austen と Shakespeare の登場人物たちは共にこれらの障害を乗り越えて「結婚」に到達することに成功する。ただ、その結婚への過程には、必ずと言って良いほど「みせかけ」と「真実」の取り違えの事件が続発する。言わば、登場人物たちは結婚への途上、様々な「取り違え」の失敗、identity の混乱を経験することで、自分にとっての「真実」なるものを発見し、最終的に真の自己発見、自己認識を獲得することとなるのである。この「結婚」に至るまでの identity の「迷想」から「覚醒」という基本的な組み立てこそが Austen の小説と Shakespeare の喜劇の中心にあると考えられる。

概して喜劇ではこの「結婚」までの道程が五幕構成によって展開される。Shakespeare 喜劇をはじめほとんどの喜劇がその影響を受けていると言われる古典喜劇の筋立てに関する公式¹³⁾によると、喜劇は五幕立てが基本で、まず第一幕では主題が明らかになり、第二幕で主題は十分説明される。第三幕で争い、および混乱状態が速度を増し、第四幕になるとその收拾策が求められて、第五幕で大団円を迎える。この筋立ての究極の目的は第一幕で欠けていたり、不完全だったものを発見することであり、幸せな結婚はその発見とともに成立することになる。石塚虎雄氏は Austen の *Pride and Prejudice* を五幕に分けて考察しているが¹⁴⁾、この「結婚」への喜劇の五幕の組み立てに、先に述べた identity の混乱による「迷想」から「覚醒」、そして「結婚」という組み立てを重ねている点で特に Shakespeare 喜劇との共通点が見出せる。そこで、石塚氏の組分けを参考にして、Austen の *Pride and Prejudice* を五幕立ての喜劇に見立てて、こ

¹²⁾ Shakespeare, William. *Midsummer Night's Dream* (Houghton Mifflin Company, 1974) p. 134.

¹³⁾ 『シェイクスピアの新喜劇』 p. 9-10.

¹⁴⁾ 『ジェイン・オースティン小説論』 p. 201.

の作品とプロットの構成やキャラクターに類似点が多いとしばしば指摘されている Shakespeare の *Much Ado About Nothing* とを、恋人たちの自己認識、そして結婚に至るまでの過程という視点から比較、検討してみたいと考える。

Pride and Prejudice の第一幕は Netherfield に裕福な青年 Bingry が友人の Darcy を連れて引っ越してくるところから始まる。最初の舞踏会で Bingry は Bennet 家の長女で気立ての優しい Jane に惹かれるが、Darcy は横柄な自負心をあらわにして、粗野な村の人々を軽視する。ヒロインである次女の Elizabeth は Darcy が自分のことを「まあまあだが私の気をひくほどの美人ではない」というのを耳にして、少々誇りを傷つけられただけでなく、彼の傲慢さは社会的権力からきていると考えて、強い反発を感じ、持ち前の性格から彼に対して非常に挑戦的な態度をとるようになる。まずは「迷想」の始まりと言うところであるが、ここに、Elizabeth の偏見と Darcy の他を寄せ付けない傲慢さが如何に克服され、且つ二人の結婚に結びつくかという主題が作品のタイトル通り早くも提示されていると考えるべきであろう。

第二幕では Elizabeth と Jane の Netherfield 滞在をきっかけに、Darcy は Elizabeth の明るく感じのよい容姿や物腰、また形骸化したしきたりや礼儀を軽蔑し自分で考え行動する強い個性に惹かれ始める。しかし Elizabeth は第一印象から Darcy の言葉を常に悪く解釈してしまい、その結果、彼女の Darcy への偏見は益々強められて、Elizabeth の Darcy 像と真の Darcy 像との乖離が大きくなっていくのである。この段階で主題は十分に説明され、「迷想」の度合いはますます深くなってゆく。

第三幕では Elizabeth の Darcy への反発を決定的にする出来事が起こる。Elizabeth はある日、Meryton に駐屯していた風采のよい青年将校 Wickam に出会う。Wickam は見かけや物腰が良いだけでなく、Darcy のような社会的権力からくる尊大さが全く見られないため、Elizabeth は Wickam に一目で好感を持つ。更に、彼から Darcy のために彼が不遇な扱いを受けていると聞かされると、その言葉を何の疑いをはさむことなく頭から信用してしまう。加えて、Darcy が姉の Jane と Bingry の結婚を阻止しようとしたという噂を聞くことで、Elizabeth の Darcy への反感は決定的なものとなる。ところが、皮肉なことに、この時点で、Elizabeth に対して Darcy から愛情と尊大さの入り混じった求婚がなされる。Elizabeth はこの Darcy の自分に対する結婚の申し出の中に、彼女の身分や粗野な家族を許せない傲慢心を見てとり、Darcy を厳しく非難する。かくして混乱状態が更に加速し、「迷想」は決定的となる。

第四幕になると Darcy の Elizabeth に宛てた手紙から、Wickam の虚言が明ら

かになる。更に Jane と Bingley の結婚についても、Bennet 家の社会的地位の低さ以上に、Darcy が Elizabeth の家族の倫理的欠如を問題と考えていたことを知らされる。冷静に考えてみれば Elizabeth もこれを事実と認めざるを得ず、自己の判断力を過信し、偏見にとらわれて Darcy に対する「真実」を見失っていたことを恥じ、ここで彼女は初めて自己を知った思いがするのである。同時に、彼女は確かに高慢さという欠点もあったが、無節操で、かつ不道徳であったことは一度も無かったとう真の Darcy 像にも気付いていくのである。

一方、Darcy 自身も Elizabeth から浴びた非難をきっかけに、我が強く、他人の愚行や悪徳に不寛容だったという意味での己の高慢さを反省し、内面的に大きく変化していくのである。まさに「迷想」からの收拾策としての「覚醒」が始まる。

“... Oh! how heartily did she grieve over every ungracious sensation she had ever encouraged, every saucy speech she had ever directed towards him. For herself she was humbled; but she was proud of him. Proud that in a cause of compassion and honor, he had been able to get the better of himself. ...”¹⁵⁾

第五幕では Bennet 家の社会的面目を失わせる Elizabeth の妹 Lidia と Wickham の駆け落ちの事件が起こるが、Darcy が尽力し、二人を結婚へ導いたことで、Elizabeth の抱いていた Darcy への偏見は信頼と愛情へと変化していくこととなる。その結果、Elizabeth も Darcy もお互いを通じて自分を知り、互いの存在価値を十分認めたくえで愛情を感じる事が出来るようになるのである。ここに、登場人物の「迷想」と「覚醒」、そして「自己認識」へというテーマが見事に完成する。もはや内面的に成長した Elizabeth にとって、二人の婚約の噂を聞きつけ、身分の差を理由に猛然と二人の結婚に反対する Darcy の伯母、Catherine de Bourgh の存在も全く持って障害とはならない。文字通り、この作品は大団円を迎える。

“Neither duty, nor honour, nor gratitude,” replied Elizabeth, “have any possible claim on me, in the present instance. No principle of either, would be violated by my marriage with Mr. Darcy. And with regard to the resentment of his family, or the indignation of the world, if the former were excited by his marrying me, it would not

¹⁵⁾ Austen, Jane. *Pride and Prejudice*, (Holt, Rinehart and Winston, 1967) p. 307.

give me one moment's concern---and the world in general would have too much sense to join in the scorn."¹⁶⁾

以上見てきたように、Austen は *Pride and Prejudice* において、Elizabeth と Darcy が「幸せな結婚」に至るまでの物語を五幕仕立ての喜劇に組み立て、その中で「迷想」（一幕から三幕）と「覚醒」（四幕）、そして「自己認識」（五幕）に至る道程を見事に描いているのである。

次に *Much Ado About Nothing* を見てみると、第一章は Benedick と Claudio が所属する軍隊が戦いで勝利をおさめ、Beatrice とその従妹 Hero の住む村へ帰ってくるところから始まる。Claudio と Hero が好意を寄せ合うのと対照的に、Benedick と Beatrice は負けず嫌いで気性が激しく、会えば必ず機知合戦となるが、どことなく互いに意識している様子が伺えることが描かれる。Hero と Claudio の結婚と、勝気なところが邪魔をして反発ばかりしている Beatrice と Benedick がどのようにして結婚に至るかという主題がここで提示されている。

第二幕では Hero と Claudio の結婚が決まる。友人たちは式の日を迎えるまでに、Beatrice と Benedick のもう一組のカップルを誕生させようと計画し、わざと噂話を立ち聞きさせて、互いに相手に好かれていると思わせる。まずこの計略にかかったのは Benedick というわけで、主題が十分に説明されていると判断される。

第三幕では Beatrice も立ち聞きによる「みせかけ」の情報を信じてしまう。二人とも皆の噂する相手の美德を離れた場所から客観的に聞いてみてなるほどと納得し、また相手が自分を愛しているという確実な証拠を手に入れたために威勢を張る必要もなくなって、恋など頭から馬鹿にしていた以前とは別人のように、恋煩いにかかってしまう。しかし Benedick も Beatrice も相手の虚像に翻弄されており、二人の相手への愛情は「みせかけ」によって築かれたものにすぎず、周囲からは滑稽にしか見えない。まさに混乱状態が速度を増していると言えよう。

第四幕で結婚の妨害を企む Don John によって Hero の不貞を信じ込まされた Claudio が結婚式の最中 Hero を罵倒する事件が起こるが、この一件で、今まで騙されていたに過ぎなかった Benedick と Beatrice はありのままの気持ちを伝えあい、Hero の無実を信じて疑わない Beatrice が「敵をとって Claudio を殺して欲しい」と訴えると、Benedick は恋人のために親友に背を向けるという大きな

¹⁶⁾ *Ibid*, p. 338.

試練を受ける決意を固める。

Bene. I do love nothing in the world so well as you: is not that strange?

Beat. As strange as the thing I know not. It were as possible for me to say I loved nothing so well as you; but believe me not, and yet I lie not; I confess nothing, nor I deny nothing. I am sorry for my cousin.

.....
Bene. Enough! I am engaged, I will challenge him. I will kiss your hand, and so leave you. By this hand, Claudio shall render me a dear account ...¹⁷⁾

ここで初めて本当の意味で、みせかけや気取りを捨てて二人とも心が通じあったと言えるのではないだろうか。即ち、大団円に向けての收拾策の提示である。

第五幕で Hero の濡れ衣は晴れ、また「立ち聞きの噂話」が皆の計略であったことが発覚するが、二人の気持ちが変わることはない。

Bene. Come, I will have thee; but by this light, I take thee for pity.

Beat. I would not deny you; but, by this good day, I yield upon great persuasion, and partly to save your life, for I was told you were in a consumption.

.....
Bene. I'll tell thee what, prince; a collage of wit-crackers cannot flout me out of my humour. Dost thou think I care for a satire or an epigram? No; if a man will be beaten with brains, a' shall wear nothing handsome about him. In brief, since I do purpose to marry, I will think nothing to any purpose that the world can say against it; and therefore never flout at me for what I have said against it, for man is a giddy thing, and this is my conclusion.¹⁸⁾

「立ち聞き」による思い違いという「迷想」は、それが計略だったと分った時点で終わるが、その喜劇的トリックによる「迷想」を体験することで、Benedick も Beatrice も自分の欠点に気付き、本当の自分を知るという「自己認

¹⁷⁾ Shakespeare, William. *Much Ado About Nothing* (Houghton Mifflin Company, 1974), p. 354.

¹⁸⁾ *Ibid.* p. 362.

識」を獲得出来るのである。即ち、この喜劇的トリックの内幕を知るという意味での「覚醒」が起こった時、二人は、初めてお互いの愛情と信頼に気づき、真の意味での「自己認識」に到達出来たと考えられるのである。かくしてこの喜劇は見事な大団円を迎えるのである。

この様に Shakespeare 劇の場合には「迷想」も「覚醒」も極めて喜劇的なトリックによってもたらされるのであるが、基調は「結婚」をめぐる登場人物の「迷想」と「覚醒」、そして「自己認識」に至るという点で、Austen の場合と同じである。かくしてこの結婚をめぐる「自己認識」のテーマは Austen と Shakespeare の両者に共通する重要なテーマと見なされて良いであろう。

結び

Austen も Shakespeare も「みせかけ」と「真実」の取り違えのテーマを喜劇的人物や道化、そしてヒロインの描写を通じて作品中に描いている。ただ、喜劇的人物や道化は、仮に「取り違えの」間違いを犯したにしてもそのことで内的変化を遂げることはない。彼等は本質的な意味で「自己認識」へと「覚醒」することは決してないのである。一方、これに対して、ヒロインは数々の「取り違え」の誤りを経験することで見事に「自己認識」へと「覚醒」していくのである。このヒロインの体験する「迷想」からの「覚醒」、そして「自己認識」へと言うテーマを物の見事に喜劇の枠組みを使って描いているところに Austen と Shakespeare の作品における最も重要な類似点が見出せるのではないだろうか。

十八世紀後期、小説が誕生してまだ一世紀に満たない発展途上の時点で描かれた Austen の小説には、Austen が当時の文学における様々な要素を積極的に取り入れ、試行錯誤を繰り返して、独自の小説世界を生み出していく過程を見ることが出来る。実際、Austen の *Juvenilia* は書簡体で書かれており、最初の本格的小説 *Northanger Abbey* は当時流行していたゴシック小説のパロディ、代表作のひとつである *Sense and Sensibility* も感傷小説の揶揄であった。しかし、こうした新しい小説の勃興という時代風潮の中でも、当時の演劇の復興や素人演劇による演劇熱の高まりには目を見張るものがあつたことは既述したとおりである。この意味で、Austen が演劇から決して眼を背けることなく、逆に演劇から多くのものを学び吸収し、それを独自の小説形成に生かしていったことは間違いの無い事実であろう。

以上、Shakespeare は Austen が特に愛好していた作家であり、直接的な影響とは言えないまでも、その喜劇的精神性を養う上で、また人間の内面的テーマ

を描く方法を見つけ出す上でも、Shakespeare が Austen 文学に多大な貢献をしたと考えられるのである。